令和2年度 かいじあむ古文書講座 第4回



はじめに

一界をみ も 前 き なさ で古文 П ず 引き 思 書講 楽 字 ま す



み

なさ

講師近影 現在博物館はサブエントラ ンスからのご入場をお願い しております。

今回は災害についての古文書

今 資 口 を は と 思 地 0 点 古 震 ず ま لح 書 す 水 つ 害 で 災害 す 関 す

豊 か な Щ た 梨 か 来 な き ち 県 ま 自 然 な は で 災害 然 地 被 た 害を 域 そ に 今 に ŧ 0 井 影 さ 恵 ま ま 響 4 れ は を ざ だ 歴 た 与え 史 ま 地 け な

関 す る 資 関 料 する資 県

まずは地震について

近で 関東大震災と、 害 が 梨 大き 県 は 大 に か お 正 つ け 12 た る 年 地 も 嘉永7年 (1923) 震 の は で 被 直

海・南海地震です。

震度 いず 考えら h 6 0 0 地震 揺 で に ŧ ま 見舞 す 甲 府 は

な 被害が に 地震」 は い わ ゆ 甲 斐 る で ある 国 全 います。 「南海 域に 後者

江戸時代の地震

元禄の大地震

- 元禄16年(1703)11月23日夜八ツ時(午前2時)発生
- マグニチュード7.9~8.2の相模トラフを震源とする 海溝型地震
- 関東南部に大被害、東日本全域に津波や地殻変動
- 翌年の宝永への元号変更のきっかけとなる
- 甲斐国は甲府徳川家による統治時代

宝永の大地震

- ・宝永4年(1707)10月4日昼八ツ前(午後2時前)発生
- マグニチュード8.7の南海トラフほぼ全域を震源とする 海溝型地震
- 太平洋沿岸を中心に大津波などの被害
- この49日後の11月23日に富士山が噴火
- 復旧費用が幕府財政を圧迫、元禄文化終焉。甲斐国は柳沢家の統治時代にあたる。

の江斐 時 き \mathcal{O} な 害 が 震 あ

は

江戸時代の地震

天明の大地震

- ・天明2年(1782)7月15日 戌の刻(午後8時)発生
- マグニチュード7.0程度

安政東海地震

- ・嘉永7年(1854) 11月4日 朝五ツ半時(午前9時)発生
- マグニチュード8.4の南海トラフの東側を震源とする 海溝型地震
- 大平洋沿岸を中心に大津波(最大20メートル超)などの被害
- 翌日に安政南海地震
- 安政に改元するきっかけとなる。

の江斐 時 き 害 が 震 あ は

江戸時代の地震

安政南海地震

- ・ 嘉永7年 (1854) 11月5日 タセツ半時 (午後5時) 発生
- マグニチュード8.4の南海トラフの西側を震源とする 海溝型地震
- 大平洋沿岸を中心に大津波(最大20メートル近く)などの被害
- ・安政東海地震の約32時間後に発生
- 東海地震などとともに安政に改元するきっかけとなる。

の江斐 時 のき 害 が 地 あ 震 は

歳云録 抄 (若尾資料)

う資料 政東海 を出 I) る える資料 まっ 崩 の が れ てい です 地震 た 歳云録 は おきます 内容が な あま 0 以前の い 本資料は 書 の IJ 状 か な で解読文 抄 < 況を伝 あ 7 ま

当館所蔵資料で、

れら安

〇元禄十五年午歲上月三日夜八万時甲府大地震宁羽 町横丁南側つられり嘉永七寅年远百五十三年一次の

0 昼よう夜、入をようの 角東側は陽南いつの同日十一日屋九ヶ時ろ一山境 實永四年 亥藏十月四日至八分時前大地名人町之守程 で割きる魚町立丁日南側裏とる湯頭いならか町山 ~燒多當意水七歲年起百四十

0 ○嘉永七寅年土月四日駿府大地震、行即恢久能山南京 天明二年寅年七月湖東大地震家と精灵棚のなうる 唐令子·嘉永七寅年这七十三年、阿为 近國內事係多例見小师用同土月十五日殿府內名

歳云録 抄 (若尾資料)

※「元禄十五年午歳」は西暦1702年にあたり元禄十六 大地震、 七寅年迄百五十三年ニ成る 片羽町柳町横丁南側つぶれる、 嘉永

〇元禄十五年午歳十一月廿二日夜八ツ時甲府

年の間違い。 町々六寸程ツ、割れ り湯湧 宝永四年亥歳十月四日昼八ツ時前大地 いづる、 「廿二日夜八ツ時」は23日未明のこと。 柳町八日町角東側え湯湧 る、 魚町五丁目南 :側裏よ

三年二成る 天明二年寅年七月関東大地震、 かさりつけ落ると云ふ、 嘉永七寅年迄七十 家々精灵棚 り夜二入すさましく焼る、

当嘉永七寅年迄百

同月十二日昼九ツ時ふし山焼出る、

昼よ

四十八年二成る

〇元禄十五年午歲土月七一日夜八万時甲府大地 町横丁南側つられる嘉永七寅年远百五十三年一次 震 宁羽

0 昼でう夜、入えてる 角東側は陽南いつの同日十一日屋九り時ろ一山境 賢永四年 亥歲十月四日至八分時前大地名人町之守程 で割きる魚町五丁目南 一燒多當意永七寅年也百四十 倒裏とる湯湯いなりか町八日

0 ○嘉永七寅年二月四日駿府大地震、行即恢久能山南京 天明二年寅年七月湖東大地震家と精灵棚のなうる 唐令子·嘉永七寅年这七十三年、阿为 近國內不係多何見小师用同二月十五日殿府內名

歳云録 抄 (若尾資料)

〇元禄十五年午歲上月三日夜八万時甲府大地震 今 が を読 が 伝え 発 ある安政東海地震 で、 П 知 生 んで参り は これら る の 断 記 た Z 片 際 لح 的 録 ます が な の次の大地震 0 0 できます がら 状 ようなかた 況 もう が の資料 か 宁羽 0 言

の

よう

に

甲

斐

玉

で地

0 角東側は陽南いつの同日十一日屋九ヶ時ろ一山境 賢永四年 多歲十月四日至八岁時前大地名人町之守程 で 割きる魚町立丁目南 町横丁南側つられる嘉永七寅年远百五十三年一次 倒裏とう湯湯いならか町山

0 ○嘉永七寅年土月四日駿府大地震、行即恢久能山南京 天明二年寅年七月湖東大地震家と精灵棚のなうる 唐令子·嘉永七寅年这七十三年、阿为 近國內事係多例見小师用同土月十五日殿府內名

昼でう夜、入えてる

燒多當處水七寅年也百四十

甲府大地震之記 (甲州文庫)

資料を開

的読みやす

部

類で

す

ので



的であ ある「甲府大地震之記」 (甲州文庫) 況を詳)政東海 細 南海地震 記 の冒頭は 内容も具体 た資料 の 比較 被

甲有地震工艺

沙自守的你們學同学何多有了更多了回纸上 方榜動行人品は写在社会方という人人と一句多の 老不幸多土月日的納子付去伊東本中一先 私かいぞりはてきるとうるけまするっと -----

,为到又《金经》去地表文多的人多不大梅了夫、门 右日子れる、子科古家子上書品四五日日本 後去了的也以私十人人的あからてをれて老不 アロシャかちかられるよりいら一流名中かい 三教文:如今小少多数少人一大多大不多一声 市中少多了一人出人人人人 地名的西班方一名名 はる西方教子りの下面 よの水七年出上人の日初るます

どうでしょうか。 行ずつ読んでまいりましょう。余白 に読んだ字を入れてみてください。 ようか。 。 では、 読んでいけそうで 少しずつ、

地震工房

私あいぞりはてま 榜配件不知 可字句初 李文上门的新多 門学何学何多種 はちなれるましいういんと えれます でなる事件 一連ふすの係本 文芸 加多的

解読して穴埋めしてみましょう】※印刷するかノートに書き写してください。

甲府地震之覚

嘉永七年寅

大騒動

有之、 別而

壱丁目

大地震

凭丁目三丁目 之

弐丁目三丁目

壱つも

之大変ニ候、 勿論

では、 ものとくらべてどうでしょうか。 てみます。前のページに書き込んだ 講師の解答案を赤文字で出

沙自守何称門學向学何方極了是京了回係上 私あいぞりはてま 移動行人なは写成れるまでいうろんとのなの 本年多土川谷斯多时 地震口号 てまれまするっと るでをなるが

解読して穴埋めしてみましょう】 蔵等ハ無事成者壱つも無之前代未聞之大変ニ候、 弐丁目三丁目柳町弐丁目三丁目大損之建家者勿論土 大騒動潰れ家潰土蔵数多有之、 嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震市中一統 甲府地震之覚 別而八 日町壱丁目魚町

甲有地震工學

沙自守何你們以何年何去核了是京了回经上 おかいかりはてきる 万時到代人家は万天教をあるという人のとうの名の かれて年了上月日的好子 とるいまするっと けるでなんかず

【まずは読み下してみましょう】

甲府地震之覚

蔵等ハ無事成者壱つも無之前代未聞之大変ニ候、 弐丁目三丁目柳町弐丁目三丁目大損之建家者勿論 大騒動潰れ家潰土蔵数多有之、 嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震市中一統 別而八日町壱丁目魚町

甲府地震の覚え

地震市中一統大騒動潰れ家潰れ土蔵あまたこれあり、 損ないの建て家はもちろん土蔵などは無事成るは一つも これなく前代未聞の大変に候 して八日町一丁目魚町二丁目三丁目柳町二丁目三丁目大 嘉永7年寅11月4日朝五ツ時(午前9時頃) 別

甲有地震一是

沙自守日初門学月学月支持了建了一个人 ち時かけんなはちなれるましいうろんとうのとの 私かいそうはてきるとうかけまするっきい 九水本文土川谷納子けるだなる中一流

【では1行ずつ読んでいきましょう】 甲府地震之覚

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震市中一

まず内容や語彙の確認です。

- 嘉永七年 この年のうちに「安政」と改元する。 = 西暦1854年、震災などの災異のため、
- 寅 干支の表記。このとしの干支は「甲寅(きのえと
- 朝五ツ時当時の不定時法の時間表記。地震発生日は 8時ごろ。 ため、午前9~10時ごろとなる。夏期ならば7~ 西暦換算すると12月23日に相当し、 ほぼ冬至の

沙自守何柳門华何年何方核了是京了回係上 私かいぞりはてきるとうるけまするっと ちたかけんなはちあれるましとうころとうのとう 九水本文土月谷納子付大門表亦中一流

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

甲府地震之覚

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震市中一統

- 寅(ずし方の特徴があるわけではないですが、月日 されます。 表記の上には、年表記が書かれず干支が入ることが多 丁寧に年表記まであるので、間違いなく「寅」と特定 冠が付く十二支は「寅」しかありませんし、ここでは く、年代特定の大きな手掛かりになります。また、ウ
- **五ツの「ツ**」 少し厳しいですが、時間表記ですので、 「ツ」と読むものと思われます。
- を省略した中国語の簡体字のようになります。 「日」へんに「寸」のようになっており、

沙自守的衙門华的年的方移 あるいぞりなっ 房面は不知は多本おるましいう 七年夏土月 一元八年で 一旦かけの深土 文変い

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

甲府地震之覚

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震市中一 統

時

脐 持

沙自守何你們學何年何去核了是京了回係上 私かいぞりはてきるとうないまするっきい を移動は人気はちあれるましとうころとうのと 九水本文土川谷湖子町大阪水本年一流

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】 甲府地震之覚

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震市中一統

せます。 中」という語がありますから、おそらく「市中のみん な」といった表現になるのだろう、という類推も働か は崩しすぎです。つくりが「充」に見え、上に「市 一 統 「糸」へんと読む判断がカギになりますが、この場合 全体、一同といった意味となります。ここでは

統統統統統

沙自守何你們學同学何去核了是京了回係出 私かいぞりはてきるとうかけまするっきい ちばかけんなはちあれるまっというからからの 元水下午了上月的新子付大門表亦中一流

【では次の一行を読んでみましょう】 大騒動潰れ家潰土蔵数多有之、別而八日町壱丁目魚町

まず内容や語彙の確認です。

- 潰れ家潰土蔵 家屋や土蔵が倒壊していることを示し
- ています。
- 別而 いった意味になります。 「べっして」と読み、 「特に」「とりわけ」と
- の通りです。 日町 現在のNTT甲府支店に面した甲府市の東西
- 魚町 八日町の東寄りに接続する南北の通りです。

甲有地震工是

沙自守何你們學向学何去核了是京了回係出 あるいぞうはてきしてるいまするっと を移動は人気はちあれるまっというからからのとうのと あれて年後土月的新子付大阪家中一流

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】 大騒動潰れ家潰土蔵数多有之、別而八日町壱丁目魚町

がだいぶ簡略化されているのがポイントになります。「又」と「虫」はよいのですが、「馬」へんのくずし 騒動の「騒」 これも難しすぎますね。つくりの

私かいそうはてきるとうかけまするっきい 沙自守何称門华何年何方核了是京了回係上 ちたかけんなはちなれるましいういろとうのとの 意私本文土月沿湖多时大吃家亦中一流

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】 大騒動潰れ家潰土蔵数多有之、別而八日町壱丁目魚町

潰 さんずいと「中」までは良いでしょう。「貝」の くずしが簡略化されているのがポイントです。

演演法法徒

土蔵 を覚えてしまいましょう。 「蔵」もわりと出てくる文字なので、くずし方

れるなれれれれ 蔵蔵蔵蔵蔵 れたろろえ

沙自守何柳門中向年何方核了是京了回係上 私かいそうなてきるとうなけまするっきん ちたかけんなはちあれるましいういろとうのと 意水本多土月谷朔子付大阪家市一流

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】 大騒動潰れ家潰土蔵数多有之、別而八日町壱丁目魚町

- 数多の「数」 今回の例のように、「女」が省略され たくずしになることがあります。
- 別而 「別」もシンプルゆえに迷いますが基本的に文 字を構成するパーツがそろっています。 「て」と読む変体仮名になります 一価は

ろうあるる あるあるるるるるるる なう

壱丁目 「士」に「ヒ」のようなくずしになります。 稀に「弌」などが混在しますので注意しましょう。 また「1」表記はこの「壱」のほか、「一」や「壹」、

甲有地震一是

沙山中的柳門中向学月去梅了建了一个大 私かいそうなてきるとうなけまするっきん ちゅうかけんなはちあれるましとういろんとうのとう 意水本文土川谷都子付大門表亦中一流

【では次の一行を読んでみましょう】 弐丁目三丁目柳町弐丁目三丁目大損之建家者勿論土

まず内容や語彙の確認です。

く通りです。 柳町 現在の遊亀通りに相当する甲府市街を南北に貫

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- 斜めの字画があると判読の手がかりになります。 ほうが読みづらいですね。文字右側に「戈」のような 行頭の「弐丁目」よりも柳町の「弐丁目」の
- 読に苦労しないで済みます。 ここでは損の「貝」がほとんど省略されず、 判

甲有地震工是

私かいそうなてきるとうかけまするっきい 沙自之中的称門华向华的方榜了更多了回係土 を移動は人気はちあれるまりとうとうかられるの 元水本文土1日谷的子付大阪を水本中一流

【では次の一行を読んでみましょう】 弐丁目三丁目柳町弐丁目三丁目大損之建家者勿論土

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】 勿論の「論」 中国語の簡体字のようなくずしになります。 ここでは「言」べんに注目しましょう。

甲有地震工艺

沙自守何柳門华何年何方核了更京了回係上 ち時あけんなはちあれるまっというからからの 私かいぞりはてきるとうなけまするっきい 意水本多三月的期子时去吃家年一玩

【では次の一行を読んでみましょう】 蔵等ハ無事成者壱つも無之前代未聞之大変ニ候、

まず内容や語彙の確認です。

無之 「これなく」を読みます。 「有之(これあり)」

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

えてしまいましょう。 「木」や「ホ」のようなくずしになりますので覚

给给公务了可力办本人 等等等等等 着等等行的 イタかりろ

甲有地震一是

沙自守何柳門华何年何方核了更京了回係上 方榜動行人品は写在れるまりとうう人人一人の名の 私かいそのはてきるとうないまするっきい 九水本多五月日日初多付大吃冬本年一玩 サイクト かる はいかい

【では次の一行を読んでみましょう】 蔵等ハ無事成者壱つも無之前代未聞之大変ニ候、

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】 ます。「心」も同様です。「事」は「す」の横棒を無事 「無」の「灬(れんが)」は横棒一本に省略され 取ったようなくずしになりますので覚えてしまいま しょう。

やえててせ 超色,在水上 **聚縣无坐垒** 外安化をそれ 以此此代代人

沙自守日初門学月学月支持了建了一是多了回纸上 私かいぞりはてきるとうないまするっきい 大陸到行人品は写成れるまでいうからからの 九水本多点上月的物子付大地表亦中一流

【では次の一行を読んでみましょう】 蔵等ハ無事成者壱つも無之前代未聞之大変ニ候、

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

成 りすることもあるので、覚えていきましょう。 のでセットでおぼえたり、「城」などパーツで読めた成善特徴的なくずしになりますし、「来」と似ている

者(は) 変体仮名で、頻出なので覚えてしまいま しょう。

华城华华华

私かいそのはてきるとうかけまするっきい 沙自守何柳門学月学月支持了建京了回纸上 方榜動行人品は写在れるまりとううからから 九水本文土川谷湖子町大阪本年一先

【では次の一行を読んでみましょう】 蔵等ハ無事成者壱つも無之前代未聞之大変ニ候、

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】 使って文字を建築することは、 とんどありません。 「灬(れんが)」だけでなく、横棒三本縦棒四本も 「無」は再出ですが、さらに省略されています。 くずし字の世界ではほ

我是是我是是我

私かいそうなてきるとうなけまするっきん 沙自守何称門华何年何方核了更多了回係土 ちたかけんなはちあれるましとうころとうのとう 意水本多土月谷朔子付大阪東南中一流

【では次の一行を読んでみましょう】 蔵等ハ無事成者壱つも無之前代未聞之大変ニ候、

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

未聞の「聞 」 ではなく「タ」のようになるのが特徴です。 に省略され、「聞」の場合は、かまえのなかは「耳」 「門」がまえは「ウ」かんむりのよう

いくつかのくずし方を覚えてしまいましょう。 このくずし方は割とよく出てくるパターンです。

学はする内内的

後するからいらりれて後いあからてをれて老不 アロシャかちかられぐるりいら一流名中かい 又公居程、安地意义是那么多不大极 ~ 我方方十十七老品及るでは

【続きを解読して穴埋めしてみましょう】

右同日 度 りも震 翌

又々 之大地震、夫 所々尚亦大損し夫より

続十五日 ŧ 震不

右二付四日 十五日

11

ŧ

候、

,为到又公安松、安地市人支西八多不大梅丁夫、门 後まるの近日私十人後のあるかしてをれて表不 右日れる、子村ちるりしまるはなることは私名中 アロシャかちかられぐるりいら一流名中かい

申一日も無之候、右ニ付四日夜ゟ十五日頃迄一統宿中或ハ 続十五日頃迄同様、其後も当分少しツ、昼夜共震不 右同日夜迄二三拾六度斗りも震申候、翌五日も同様夕申 ノ下刻又々余程之大地震、夫ニ而所々尚亦大損し夫より引 【では講師の解答案を見てみましょう】

き十五日ごろまで同様、その後も当分少しずつ昼夜とも 右同日夜までに三十六度ばかりも震え申し候。翌五日も 五日ごろまで一統宿の中あるいは 震え申さざる一日もこれなく候。右に付き四日夜より十 同様夕申の下刻(夕方4時ごろ)またまたよほどの大地 【読み下してみましょう】 それにて所々なおまたおお損ないしそれより引き続

,为到又《金经之安地志》表面、多不大梅一夫、行 右日れる、我与友子と意思望るる日本 後まるの也は私十後、あるかしてをれて表不 アロシャかちかられぐるりいら一流名中かい

【では一行ずつ読んでいきましょう】

右同日夜迄ニ三拾六度斗りも震申候、翌五日も同様夕申

まず内容や語彙の確認です。

- 三拾六度 余震の多さを物語っています。
- る)の下刻で概ね夕方4時過ぎ、で安政南海地震が発 **翌夕申**(次行) 翌日(11月5日)夕方の申(さ 生した時刻を指しています。

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

きます。 夜 が「迄」なので、時刻などの表現が入ることが想定で 少し難しいかもしれないくずしですが、次の文字

彪和在犯犯 光积的地方

う到又《金松、玄地震大多的人多不大橋一夫、行 右日れる、我与友子と意思望るる日本 後まるの也は私十後、あるかしてをれた意不 アロシャかちかられぐるりいら一流名中かい

【では一行ずつ読んでいきましょう】

右同日夜迄ニ三拾六度斗りも震申候、翌五日も同様夕申

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- 現されますので覚えてしまいましょう。 (しんにょう) 」はほとんど「し」のように一画で表 「乞」はかたちが残っていますが、部首の「辶
- はらいの特徴がないため、少々判読しずらいパターン三拾六度の「拾」 つくりの入りにあるべき一画目の となっています。かたちだけでは「於」などと区別が つかないので、文脈から判断することも必要です。

追起选选色 むととととられれれ 馬公をさを

核核核核核 捻捻松松松

,为到又公安松、安地高大多两人多不大梅了夫、行 右日れる、子村古るりしまるのをあるいれる中 後するからいとりれて後いあからてをれて表不 アロシャーのちょうなりれぐるりいら一流名中かい

【では一行ずつ読んでいきましょう】

右同日夜迄二三拾六度斗りも震申候、翌五日も同様夕申

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

けに見えるように書かれることが多いです。 「廿」が省略されて「广(まだれ)」と 「又」だ

斗り(ばかり) ここでは「**斗**」を充ててますが、 ように省略されて「十」がくっつく「計」のくずしは、「計」でもよいです。「言」べんが中国語の簡体字の 「斗」とほぼ同じかたちとなり、いずれでも「はかり (ばかり)」と見做されます。

,为到又《金经、金地志及支馬的公为不大梅丁夫、门 後去了以近日私十人後のあかりてをれて老不 右日れる、子村古友子と老品を云る日本 アローターのちかかられぐるりいら一流名中かい

【では一行ずつ読んでいきましょう】

右同日夜迄ニ三拾六度斗りも震申候、翌五日も同様夕申

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

「斗」と「計」

444 斗みいいる

計計計計计

为 右のなれる、うわちなりしまるのなるののなる 後去了的也可私十人人的あからてをれて老不 アロシューいちをみでり秋くるりいら一流名中かい 又公常经一大地震大多的人多不大大人

【では一行ずつ読んでいきましょう】

右同日夜迄ニ三拾六度斗りも震申候、 翌五日も同様夕申

続 様 省略されたパターンでしょうか。 いて文字のかたちを見ていきましょう】 少し難し いくずしですが、 「羊」の部分がかなり

据和摄物辐棒 报初摄物极横 极格旅粮粮粮 抗弱振精榜樣 絕機構

粉粉粉粉粉 かがれれる 1383 株林玩玩 的我独孤称粉 かりななれなれる 的纸纸纸纸

,为到又公安松、安地京人支西八多不大梅一夫、门 後まるの也は私十人後のあるかしてをれて表不 右日はいいまちるりしまるはなるといれる中 アロシャかちかられるるりいら一流名中かい

【では次の一行を読んでみましょう】

ノ下刻又々余程之大地震、夫ニ而所々尚亦大損し夫より引

まず内容や語彙の確認です。

余程の大地震 安政南海地震のことを指します。

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- · 夫二而(それにて) 接続的な表現でよく出て来ます。 変体仮名の「而(て)」は復習です。
- 尚亦 (當)」と似ているのでご注意ください。 くずしには問題はありませんが、「尚」は「当
- 弓 ることがあります。 「弓」へんはこのように、ほとんど一本の棒にな

う到又《客程》去地表文多到了多不大橋一大、門 右日れる、子科古るりと老品を云るいれる中 後するかいとりれて後いあるかしてをれて表不 アローシャの方子の方子の人子子りいら一流名中かい

【では次の一行を読んでみましょう】

続十五日頃迄同様、其後も当分少しツ、昼夜共震不

内容や語彙の確認はありません。

続 いて文字のかたちを見ていきましょう】

- ・續 「続」の旧字です。
- 頃 すが、つくりの「頁」はかなり省略さ ボックスに梁を二本も入れるようなこ 「頁」は「頭」や「預」、「頻」などく、このように省略されてしまいます。 れています。「頁」の「目」のような よく出てくるパーツなので覚えるよう へんの「ヒ」はなんとなく読めま くずし字の世界にはほとんどな

項

にしてください。

,为到又公安松、安地高大多的人多不大梅一大、门 右日れる、子科古家中上老品型云子口杯る中 後まるの也は私十人後のあるかしてをれて老不 アローシャのちかられるるりいら一流名中かい

【では次の一行を読んでみましょう】

続十五日頃迄同様、其後も当分少しツ、昼夜共震不

内容や語彙の確認はありません。

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

· 頃

- 同様 「様」は復習ですね。
- 其 しょう。 これもよく使われる文字ですので覚えてしまいま

,为到又《金经之艺地志及多两人多不大梅一夫、门 右回れる、多好方方子と意思を云るいれる中 後するらい也はれ十人人のあからてをれて老不 アローシャのちからなられぐるりいら一流名中かい

【では次の一行を読んでみましょう】

続十五日頃迄同様、其後も当分少しツ、昼夜共震不

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- る字ですので、前述の「尚」との違いなどにも注意し て覚えていきましょう。 「当」は旧字の「當」で書かれています。よく出り、「人」べんなどとの区別はつきません。

内のなるのないのかる 当省高高省 省路路路山山

,为到又公安松、安地市人支西八多不大梅丁夫、门 後まるの也は私十人後のあるかしてをれて表不 右日はいいまちなりしまるはなるといれる中 アローシャのちのなられるるりいら一流名中かい

【では次の一行を読んでみましょう】

続十五日頃迄同様、其後も当分少しツ、昼夜共震不

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- 昼夜 来た「夜」も、ここで読み解けるのではないでしょう 「昼」はほぼくずれていないので、 先ほど出て
- 共 くずしになるということで覚えてください。 「共」はもともと画数も少ないので、このような

う到又《家経、去地震大多四人多不大橋一夫、門 右日れる、子科古家子と書の出るではれる中 後するらい也りれ十人人のあかりてをれて老不 アローシャの方の方の人なるりいら一流名中かい

【では次の一行を読んでみましょう】

申一日も無之候、右ニ付四日夜ゟ十五日頃迄一統宿中或ハ

内容や語彙の確認はありません。

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- ず)」であるとか「申上(もうしあげ)」など組み合わ せパターンで読める字であるとも言えます。 横棒一画を省略しているので、 「申」は使われることが多く、「不申(もうさ 「中」と同様です
- 無之 「無之 (これなく)」も復習ですね。
- 「ヿ(こと)」など数例なので、頻出する「ゟ」からゟ(より) 合字と言われるもので、「〆(しめ)」 始めて覚えていってください。
- 「頃」も「迄」も復習ですね。

,为到又《金粉、金地志及美面、多不大梅一夫、门 右回れる、多好方方子と意思を云るいれる中 後去了的也以私十人人的あからてをれて表不 アローシャルちかられくるりいら一流名中かい

【では次の一行を読んでみましょう】

申一日も無之候、右ニ付四日夜ゟ十五日頃迄一統宿中或ハ

· **ゟ**(より) などの合字 【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

合字

2

人おスパ 水七年出上人口的到了多

【続きを解読して穴埋めしてみましょう】

藪又ハ

御救米 之上 潰

市中

御

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ半時

様

急為

人科スンク うろうとどからというははい 月七六大子子子上西路

【では講師の解答案を見てみましょう】

いれてると出土人に日知るる

藪又ハ畑中江小屋掛ケ致し罷在候、右ニ付五日両御頭様 市中御見分之上出役を以潰場所御調有之、 急為

御手当御救米被下候、左之通、

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ半時

【読み下してみましょう】

藪または畑中へ小屋掛けいたし罷りあり候。右に付き五 日両御頭様市中ご見分の上出役を以て潰れ場所お調べこ 嘉永7年(1854)寅11月4日朝五つ半時 急お手当としてお救い米下され候。左 の通り。

(午前9時ごろ)

三科文、如中小小を掛かれりときなるるとうとの題物 きるかとよめなるは後はいち

【では一行ずつ読んでいきましょう】

いれたを出土人の日初る中的

藪又ハ畑中江小屋掛ケ致し罷在候、右ニ付五日両御頭様

まず内容や語彙の確認です。

- 小屋掛け 仮の小屋を建てること。
- 両御頭 甲府勤番支配の大手と山手の2名のこと。

続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- すが、古文書のなかでは現在の「数」に近く、そこか ら「女」を省略したように見えます。 この活字は草 かんむりに「数」の旧字の
- 致 も見分けることができます。 を覚えましょう。行為を示す語なので、文中の位置で 「致」はよく出て来ますので、よくあるパターン
- ます。 パーツとしても覚えていきましょう。 「四」のようなかんむりは一画まで省略され あとは「能」の字のくずしは特徴的なので、

がおみい

【では一行ずつ読んでいきましょう】

いれて名と出土人の日初る子

藪又ハ畑中江小屋掛ケ致し罷在候、右ニ付五日両御頭様

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

· 致

罷

一彩文、如今小少多数少人一上去不不不不 是一种 きるかととかいとい 後ろ

【では一行ずつ読んでいきましょう】

より、水七年出土人の日初る中外

藪又ハ畑中江小屋掛ケ致し罷在候、右ニ付五日両御頭様

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

貨幣単位としても良く出ますので覚えましょう。

ユカナめる

- が、 頭 いです。 ここでは「豆」と「頁」としっかり書いています 「頁」は前述のようにかなり省略されることが多
- ・様 「様」も復習ですね。

人おスいい とかいろろう 月七年六十五日五日西村

【では次の一行を読んでみましょう】

いれ七年出土人の日初る年

市中御見分之上出役を以潰場所御調有之、急為

まず内容や語彙の確認です。

- 出役 が、場合によっては臨時の兼職、幕府の職である関東 取締出役のことを指すこともあります。 ここでは仕事のために出張することを指します
- 味となりますが、ここでは「~として」ないし「~の ため」で読んでみましょう。 ~させる」や「~のため」、 返読文字としてあとから読むことがある文字で、

三科文、如中小少多数少人一片是不不不不不一声 本中にろうととからと、後ろろり地方

【では次の一行を読んでみましょう】

より、水七年出土人の日初るます

市中御見分之上出役を以潰場所御調有之、急為

続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- 見分 横棒の梁2本は省略されていますね。 見 の「目」の部分は、やはり四角のなかに
- 出役 一本の縦棒一画です。つくりはしっかり「几」と 又」が一筆で続けて書かれています。 役 は「彳(ぎょうにんべん)」が前述同様
- が異なりますが、ここでは「潰」と読み進めましょう。 上に書き直した可能性もあり、既出の「潰」とは印象 ここは太く書かれており、 なにか間違った文字の
- りませんね。別のパターンとして覚えていきましょう。 既出の中国語の簡体字のような「言」べんではあ

三科文、如中小小を掛かりときなるるところのあり はる為多次年りの方 きるかしよからという はない

【では本資料最後の一行を読んでみましょう】

よい、水七年出上人に自然る年

御手当御救米被下候、 左之通、

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ半時

まず内容や語彙の確認です。

手当 く「御救米」がその具体的な対策となります。 地震被災者への救援対策のことを指します。 続

続いて文字のかたちを見ていきましょう】

- 手当 当 は旧字の「當」ですね。
- 「被」は返読文字で「~らる」と読みます。

のようにもなります。ここでは続く「下」と一体化し「被」はいろいろなくずしをとり、カタカナの「ヒ」

ていますね。

三科文、如今小少多数少人一大きの方子子 五月頭板 本中にろかとよりはと、後ろろう

【では本資料最後の一行を読んでみましょう】

よい、水七年出上人に日知るます

御手当御救米被下候、 左之通、

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ半時

【続いて文字のかたちを見ていきましょう】

被

一名スンタイトルを私か うろうとからというははい 月七年六十五日五日西村

「甲府大地震之記」の出題範囲全体の解読文】

よい、水七年出上人に日知る年

甲府地震之覚

御手当御救米被下候、 市中御見分之上出役を以潰場所御調有之、急為 藪又ハ畑中江小屋掛ケ致し罷在候、右ニ付五日両御頭様 続十五日頃迄同様、其後も当分少しツ、昼夜共震不 蔵等ハ無事成者壱つも無之前代未聞之大変ニ候、 弐丁目三丁目柳町弐丁目三丁目大損之建家者勿論土 申一日も無之候、右ニ付四日夜より十五日頃迄一統宿中或ハ 右同日夜迄ニ三拾六度斗りも震申候、翌五日も同様夕申 大騒動潰れ家潰土蔵数多有之、別而八日町壱丁目魚町 下刻又々余程之大地震、夫ニ而所々尚亦大損し夫より引 嘉永七年寅十一月四日朝五ツ時大地震市中一統 左之通、

嘉永七年寅十一月四日朝五ツ半時

(以下略)

甲府城下の倒壊家屋数と被災者数



「甲府大地震之記」(甲州文庫)などより作成。

地 被 害 道 る お 湯 甲 地 湧 畑 义 き を 0 出 ゅ 製 る 出 g 2 黒 ます 泥 地 田 甲 湧 盤 が き 機会が 城 出 田 あ ほ な 倒 甲 壊 家 被 斐 害 玉 屋

読

進

4

歳云録」(若尾資料)などの地震関係記述

- 御城追手御橋前先年湯湧出し所近年絶し所え再ひ湯湧 教安寺境内に一ケ所湯湧出る 「歳云録」
- き家 也 津 其外所々堀ぬき井戸水多く湧出る、夫より昼夜震れ続 経て駿遠大阪豆州下田辺の様子を聞くに、夥しく地震 なみ高波にて、 「歳云録」 仮 小屋を立て是に住む事十日余り、 或ハ引き或は倒れ目も当られぬ有様 追々日を
- り込候 る所数多あり、浅利より西ノ土手百間斗底へ壱丈斗ゆ 地底へ八九尺斗ツヽゆり込、 より石和宿へ之通り縄手道敷八間長百間斗之間、 「嘉永七年寅十一月 地震潰家取調帳」 両方之畑所々黒泥わき出
- 上曽根村此辺通リ三尺より壱丈迄之処所々ゆり込数ヶ 所有之候 「嘉永七年寅十一月 地震潰家取調帳」
- す、 当国ニ於て者申伝へニも不聞と年老之もの申之 六尺位 高田村并其辺并中郡筋等者、 天明中之大地震も此度より者かろく候由也 荒井殿自身并田安陣屋よりも支配々々見分有之、 出人馬通行難成所も多有之、 ひ地われ、あだかもねま(「沼」か?)之如く泥わ 田畑道共三尺四尺或者五 人馬死せし者少から 「嘉永七

年寅十一月

地震潰家取調帳」

水害に関する資料

聖とくいれる

料を1点読 水害

水害地震百姓難儀夫食拝借願(甲州文庫)

なけるのから 多天子 ナンカナイ かちろう 万比を表了る 野馬湯を

とれている

【今回は半分ずつ解読して穴埋めしていきましょう】 ※印刷するかノートに書き写してください。

乍

候

之

当村之

去ル十八日之大満水

出

川切込〇

村居

押出、

貯置候夫食流失も有之、

二相成、

草

且又去ル十四日十五日

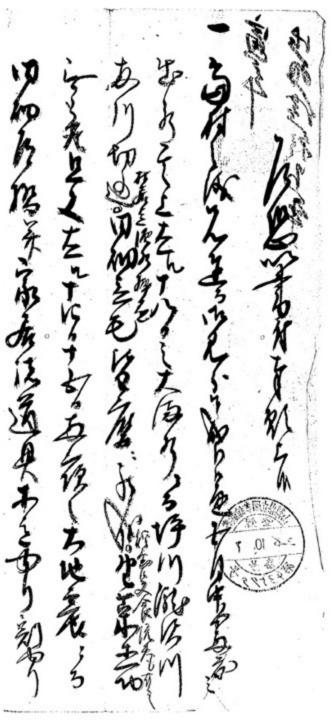
無御座、

大地震

并家居

1)

1)



では講師の解答案を見てみましょう】

乍恐以書付奉願上候

当村之儀先達而御見分被成下候通、五月中ゟ両度之

出水、其上去ル十八日之大満水ニ而坪川瀧沢川

村居迄泥水押出、

貯置候夫食流失も有之、

川切込〇田畑立毛皆腐ニ相成、 ○野草等一切

無御座、 且又去ル十四日十五日両夜之大地震ニ而、

田畑道橋并家居諸道具等迄ゆり割ゆり

そとれらう 四天子中女孩子

【前半部分を読み下してみましょう】

れあり、 15日両夜の大地震にて、 畑立ち毛みな腐れに相成り、貯め置き候夫食流失もこ 5月中より両度の出水、その上去る18日の大満水に て坪川滝沢 でゆり割りゆり(崩れ) 当村の儀先だってご見分成し下され候とおり、 恐れながら書付をもって願い上げ奉り候 野草など一切御座無く、 川両川切れ込み村居まで泥水押し出し、 田畑道橋家居諸道具などま かつまた去る14日 田

からろうのかはる人もも中 我とくをいけらけからあるのちはをあっち るとなる大 いえてきっちんですから うしたちからろう 多人

【前半部分の内容や語彙を確認しましょう。

- 乍恐以書付奉願上候 際の定型句ですね。 代官所などに文書を提出する
- 坪川瀧沢川 士川水系の河川。 いずれも南アルプス市付近を流れる富
- 村居 居住地域といった意味でしょうか。
- 成 育している農作物で、 田畑立毛皆腐ニ相成 ると「罷成(まかりなり)」の可能性もあります。 なってしまった状態を指しています。ここでは (あいなり) 」と読んでいますが、筆の入りからす 皆腐は水に浸かって駄目に 「立毛(たちげ)」は田畑の生 相

えとくというからあるのしろはをして 為子子があるる人 したちりろう るる

【前半部分の内容や語彙を確認しましょう。

く雑穀などが一般的です。 夫食 (ふじき) 農民の食料を指しますが、米ではな

十四日十五日両夜之大地震 条件にあてはまるのは、嘉永七年(一八五四) この日付で、甲州にも影響をおよぼした地震という 上野地震かと考えられます。 日」とは「六月十四日・十五日」。さらに、 いる日付が「寅七月」なので、 文書の末尾に書かれて 「去る十四日・十五 寅年の の伊賀

ゆり割ゆり(崩れ) り崩れたりした被害を記しています。 地震の揺れによって、 割れた

ゆりは天子の方は国具ある ガタくたっていっちの方ろうのちはるる Ser Ser

【前半部分の文字の 乍恐以書付奉願上候 か たちを見ていきましょう】

出水、其上去ル十八日之大満水ニ而坪川瀧沢川 当村之儀先達而御見分被成下候通、 五月中ゟ両度之

- 当村 来まし 「当」でなく「當」ですね。前の文書でも出て
- 通 今回のような用例に は注意が必要です。 うか。筆の入 かり書かれてい 「マ」の部分が 本文一行目で比較的読みづらいのは「通」でしょ 通通通 To

をもる

がとくというけらっちんろう かは 子子の方はるのみろう 多人 方地をもうち

【前半部分の文字の 乍恐以書付奉願上候 か たちを見ていきましょう】

当村之儀先達而御見分被成下候通、五月中ゟ両度之 出水、其上去ル十八日之大満水ニ而坪川瀧沢

多くはありませんので、 **ゟ**(より) て来ました。形に特徴があり、合字の用例もそれほど 合字の「より」ですね。前の資料でも出 ぜひ覚えてみてください

出水の「水」 水は特といってす。 出水の「水」 水は特になって、これまた覚ますので、これまた覚ますので、これまた覚

あれるる

前半部分の文字の 乍恐以書付奉願上候 かたちを見ていきましょう】

出水、 当村之儀先達而御見分被成下候通、 其上去ルー -八日之大満水ニ而坪川瀧沢川 五月中ゟ両度之

満水の「満

【前半部分の文字の 乍恐以書付奉願上候 かたちを見ていきましょう】

当村之儀先達而御見分被成下候通、 出水、其上去ルナ -八日之大満水ニ而坪川瀧沢川 五月中
が両度
之

瀧沢川の「瀧」

からなるのかはる人 大とくたいけらっちの方でちはをあっち 多多

【前半部分の文字のかたちを見ていきましょう】 両川切込〇田畑立毛皆腐ニ相成、 村居迄泥水押出 貯置候夫食流失も有之、 ○野草等一切

皆腐二「相成」か「罷成」か かというところです。今回は仮に「相」にしておきま にしては位置が高く妙な主張をしており、 よう。 目」を横倒しに したパーツにし 「相」の「木」の横棒 ってはやや長さが短い 「罷」の

補があるかもしれません。 用例をご覧ください 貯置」**の「貯**」 文字がかすれているので、 特徴的なくずしなので 別の候

野野野

知的為不不多以為更子之中 光とくをいけらけからちろうとちはをないろ 人人ときっていている うしたちからろう Se Se

【前半部分の文字のかたちを見ていきましょう】 無御座、且又去ル十四日十五日両夜之大地震ニ而、 田畑道橋并家居諸道具等迄ゆり割ゆり

無御座 が苦しいかもしれません。 「御座無く」と読みますが、 「御」と読むの

道 今回のように「常」などと似たくずしになります。 つくりが似てませんが「冋」の部分がカギに。

過衢街道道 をそれるととろ 到多看着 たたれれれれ 松楊 杨结杨 稿稿 档 核持

多大子の方は とれいうする 方地を表っち

【前半部分の文字のかたちを見ていきましょう】 無御座、且又去ル十四日十五日両夜之大地震 田畑道橋并家居諸道具等迄ゆり割ゆり

諸 のほうはかたちをとどめています。 「言」べんは簡略化してますが 者

道具 るところです。 6文字前の 「道」とくずしが異なるのが気にな

起

通

何卒

御救

付

候、 右 同

| 相助

存候、

被

被

候樣

存候、 難義至極仕候間、 其上前文

上通御座候得ハ、 下置候樣奉願上候、 惣百姓——同相助 、何卒御慈悲を以御救夫食 惣百姓及渇食 右願之通被仰付 同難有仕合二奉

えば、惣百姓渇食におよび難義至極つかまつり候あいだ、 置かれそうらわば、 候よう願い上げ奉り候。 何卒ご慈悲をもってお救い夫食仰せ付けられ下し置かれ 仕合いに存じ奉り候。 (ゆり) 崩れ、その上前文申し上げ候とおり御座そうら 、後半部分を読み下してみましょう】 惣百姓一同あい助け 以上。 右願いの通り仰せ付けられ下し 一同ありがたき

松付きのから

をはいる 過少なるのいまるのな過食 多四三人人口以外家 我有性人了 如小公

【後半部分の内容や語彙を確認しましょう。

(**ゆり)崩れ** 地震の揺れによって、崩れたりし した被

害を記しています。

渇食に及ぶ 飢えに苦しむことを指しているものと思

われます。

被 敬意を表す 仰付 一被と 「闕字」。 仰 の間隔は、 文書の提出先に

りかられるの日本地一日初有性で ういろうちちかかりてあれるとなっちん 記るしたけるのなりをかろくのなみな あるとる大小道であるのかちのある場合 ちから

【後半部分の文字のかたちを見ていきましょう】

申上候

崩、其上前文上通御座候得ハ、惣百姓及渇食

- 覚えてください。 「月」のくずし方の典型的なかたちなので、ぜひ
- ・惣 上の「物」が原形をあるていど留め、下の「心」 がよくあるパターンで一本の横棒となっています。

胸胸狗狗狗 あられるある 別省分 地地地地地

記るしなけるのなりをかろくのなみな ある」を大い地であるのちのある場合 いとうちちかれるかっちからありた ちてある的·日本的一日教育氏 ないから

【後半部分の文字のかたちを見ていきましょう】 難義至極仕候間、何卒御慈悲を以御救夫食 仰付被下置候様奉願上候、右願之通被仰付

難義 言に使われることと、特徴的なへんで分かりやすい字 のひとつとも言えます。 「難儀」であったり「難渋」であったりと。特定の文 「難」は古文書の世界ではよく出て来ます。

葉紫黃指指 难回難 とななるなる 发发了的兴新

記るらなけるのなりるかろんはない いっちちかりかりかっちかっちょう でした あるののおかけるるのでです ~ 一名大小道学的人的大多人的人 ちから

【後半部分の文字のかたちを見ていきましょう】 難義至極仕候間、何卒御慈悲を以御救夫食 仰付被下置候様奉願上候、 右願之通被仰付

至極 は判別できない場合があります。 した。 りの構造そのままのくずしなので比較的読みやすい字 ではないかと思います。 極 今回の「至」は「山」みたいでしたね。先に 「至」はシンプルな構造なので、 が読めたので「至」ではないかなと思えてきま 一方、「極」はつく かたちだけで

空でををき かいあいる

る 記るらなけるのなりるかろんのなみな いっちちかかりかっちかっちょう 多九五五百日日本的一日都有任人 」とおくればられるのなちのなるので ちから

【後半部分の文字のかたちを見ていきましょう】 難義至極仕候間、何卒御慈悲を以御救夫食 仰付被下置候様奉願上候、 右願之通被仰付

Ł, 仰 間 のかが理解できますね。 よくあるタイプの「間」のくずしかたです。 つくりがどのようにあのかたちにくずされていく | がまえは「つ」みたいになるまでくずします。 「仰」もよくあるタイプですね。左の用例を見る

阴肾 いなるの まないるとろう 百万万万万百 間可何

りからてあるの日子物一は私有性です ういろうちちれまれてあれるとない 記るしたけるのなりをかろくのなみな ある」を大い地であるのかちのある ちから

【後半部分の文字のかたちを見ていきましょう】 難義至極仕候間、何卒御慈悲を以御救夫食 仰付被下置候様奉願上候、右願之通被仰付

りも、 ます。 置 「置」は前半にも小さく出ていました。どちらか ずしかたの応用がしづらく、「直」に屋根を乗せるよ けども、パーツで覚える観点からすると、「直」のく というと読みやすい字(特徴のある字)だと思います 「至」に一画足した字くらいのイメージがあり

記るしたけるのなりをからいりないない いろうちちれまれてるれるとう るってあるの日子物一大多大大 ~ 一名大小山中方の大野大阪西海湾 ちから

【後半部分の文字のかたちを見ていきましょう】 存候、以上 被下置候ハ ` 惣百姓┼同相助一同難有仕合ニ奉

進めることが大事なのだと思います。 が、畳字(じょうじ)やおどり字とも言います。 いると、 はここの「候ハヽ」のように、最後に筆が跳ねたりして のですが、かたちだけでなく文意や流れを注意して読み くりかえし符号 何か別の字に見えてしまって困ることもあった 割と多用されるくりかえし符号です 個人的に



大 師 名村 主

長百姓 五兵衛

藤三郎

重右衛門

源右衛門 幸左衛門

育姓代 育姓代

上 御役 所

拝借願の全体の解読文です。】

無御座、且又去ル十四日十五日両夜之大地震ニ而、両川切込〇田畑立毛皆腐ニ相成、〇野草等一切出水、其上去ル十八日之大満水ニ而坪川瀧沢川出水、其上去ル十八日之大満水ニ而坪川瀧沢川当村之儀先達而御見分被成下候通、五月中ゟ両度之下恐以書付奉願上候

田畑道橋并家居諸道具等迄ゆり割ゆり

申上候

存候、以上被下置候ハト、惣百姓十同相助一同難有仕合ニ被下置候ハト、惣百姓十同相助一同難有仕合ニ被 仰付被下置候様奉願上候、右願之通被仰付難義至極仕候間、何卒御慈悲を以御救夫食崩、其上前文北通御座候得ハ、惣百姓及渇食崩、其上前文北通御座候得ハ、惣百姓及渇食

大師村 名主

七月

長百姓 藤三郎 五兵衛

重右衛門

幸左衛門

百姓代 清右衛門 源右衛門

上飯田 御役所

水害地震百姓難儀夫食拝借願 (甲州文庫)

資料 況を訴え そこに地震 な ŧ 溢水 登場する大師村 でし 7 (E た。 いる よる ょ 々 の 0 は、 倒壊などの被害が重なっ でしょう。 て田畑や貯蔵食料 坪川 旧甲西町 滝沢 111 . が 冠. の堤防 現在 0 た状 決壊 南

う

だけでな

地震による被害についても訴え

うことで、

2点目の資料

は、

水害関

係

ります。 そ よう るのが、 な な か 本資料の内容ということにな 役所に対 して生活支援を要

皆さんもお気づきのように 遭 安政東海 から3か月あまりのちには、 ŧ た IJ のと考えられます 南海地震が彼らを襲うことに (旧甲西町付近) さらに大きな地震 残念なことにここ は震度7の な 揺れに り

地域 要なの な境遇を に直面 いま私 の歴史が持 時代 (れる可能性にぜひ触れ ち た は の上に現在の私たちの社会があ な 人々の記録をひもとくことが大変重 もこのような状況だからこそ、 にも災害は けた かと思います。 つ り、 私たちの 重要な知見を見出 あ 知恵や心を豊かに てみてください 過去に同 々 が乗り越え ります。 たり。 よう 困難

お疲れさまでした。

書 料 います で、 甲州 の資 ずし字との に触 どは活字で読むことが ぜひもっ 、料をご 文庫 はな 災害 史 格闘 紹 と「災害に関する古文 料』など ても、 関 っていただ お する古文書」 疲 しました れさま 『山梨県史』や 収 録された資 できます ればと思 では が

また、 当館の各コ 災害に 関す ナ る古文書」 にも展示中です。 は

- 戦 国から の X セ
- 水 共生する 取 1) 社会 組 む 治水 利水 ・水の信仰】

【近代の自然災害】

あ わせてお楽 の 資 料を展示 しみください。 いますの

おわりに

しきでの〜では次すもそは今 たあはで土お、回ねうのも回。い、おど届ひの。少頃しはい、楽ごけきかしに一マ たおしろいつい 状は回ス だうみ `たづじ 況マ講ク にき、ありがとうございればます。 が改善していればよい が改善していればよい にします。8月22日 別の学芸員が登場しま がにしてください。 のかた のかた のかた のかた のかた のかた ンロかつ ま たい す いお いもが年で、度



講師近影 ご来館の際は体調・体温の確 認とマスクの着用、キープ ディスタンスをお願いしてお ります。

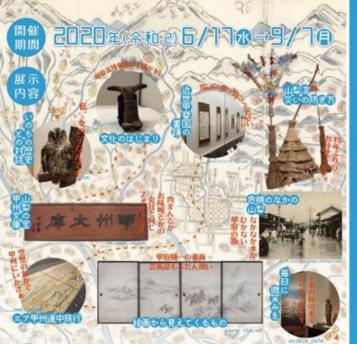




6/17**®**→9/7**®**

〒406-0801 山梨県高吹市御製町城田 1501-1 電話 055-261-2631 FAX 055-261-2632 URL http://www.museum.pref.yamanashi.jp/





改正新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言や自粛要請など

が発出された場合は、展示の休止やご来館のご遠慮をお願いする場合があります。 事前に開館状況をホームページなどでご確認のうえご来館ください。

次のお客様についてはご来館をご遠慮ください。

■発熱、風邪症状、縁覚抑害など体器に不安のある方

■新型コロナウイルス感染症患者の濃厚接触者として裂在経過観察中の方

入館時には検温およびチェックシートのご記入にご協力をお願いします。 館内では、こまめな手洗いや手指消毒の雑瓶をお願いします。

作品を鑑賞される際は、他のお客様と1m以上の距離をあけてご鑑賞ください。

壁や展示ケースには触れないようお願いします。

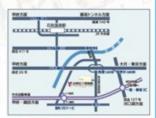
展示室内の混雑を避けるため、入賦制限を行う場合がございます。

苗軟八代スマート にから約12分。

原石和高泉駅南口からバスで約10分。 山東交通「山梨県立博物館」行き、第十四山県 バス「富士山駅」「開宿」行き。

原平的観点口からバスで約30分。 山梨交通「山梨県立博物館」行き、富士加山梨 パス「富士山駅」-「下里駅」行き。 富士告行河口運搬からバスで約40分。「甲前駅」行き。





電話 055-261-2631 FAX 055-261-2652